

ピッポ新聞

2003
8
No. 178

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500 円
編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

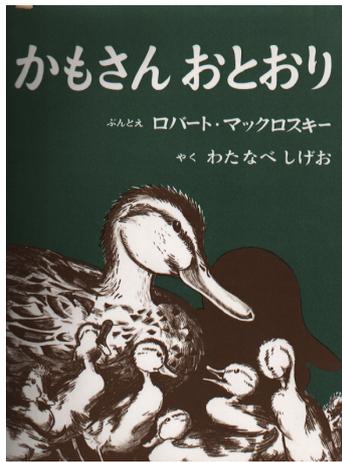
〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
Email pippo@diana.dti.ne.jp

ロバート・マックロスキー

7月のある日の静岡新聞夕刊を見ていたら、ロバート・マックロスキーの死を報じていた。ぼくの父と同じ年の88歳だという。とても残念なことである。マックロスキーは、好きな絵本作家の一人である。

ふり返れば、1996年に「アメリカ黄金時代の絵本作家たち」と題して、ロバート・マックロスキーとマーク・シーモントとマーシャ・ブラウンとバーバラ・クーニーの4人の絵本原画展を主催者の一人として、静岡で開催したし、4〜5年前に彼が、マーク・シーモント（『はなをくんくん』の画家）と来日したおり、東京まで講演会を聞きに行ったこともあった。こうしてみると、一方的（間接的）ながら、マックロスキーには随分縁が有るように思えるのである。そこで、今号では、哀悼の意を込めてマックロスキーの絵本を紹介したい。



941年に出版され、翌年コールドデコット賞を

マックロスキーの絵本と言えば、まずは『かもさんおとおり』
（わたなべしげお・訳 1365円 福音館書店）を上げる人が多いだろう。この絵本は1

受賞した、いわば彼の出世作である。

この前年（1940年）の『ハーモニカのめいじんレンティル』（まさきりこ・訳 1680円 国土社）が、マックロスキーの最初の絵本である。

マックロスキーは『かもさんおとおり』を描くために、動物園や博物館に通い何百枚もデッサンを繰り返し、最後は自分のアパートの風呂場にカモを飼ってまでデッサンを続けたエピソードは有名である。

こんな努力の積み重ねの結果が、親ガモや子ガモのあのリアリティーのある羽や、カモたちのユーモアある動きとして表現されたのである。

『かもさんおとおり』の圧巻は、カモの夫婦が自分たちの営巣に適した場所を探すために飛びながら眺めたボストンの町の鳥瞰的に描かれた場面と、母ガモと子ガモが父ガモの待つ場所まで町中を行進して行く場面であろう。

太っちょのお巡りさんが、カモたちのために一生懸命に交通整理をしている姿や、驚きながらも町中の人々がこれを見守る場面にこそ、人情味溢れる人間らしい暮らしが描かれていて、子どもを含めた読者の共感をさそつのである。



おじさんのドーナツ店を手伝って、店中をド

3番目の本として1943年に『ゆかいなホームーくん』（石井桃子・訳 672円 岩波少年文庫）という童話を書いた。これは、機械いじりの好きな少年ホームーくんが、強盗を捕まえたり、

ナツだらけにするというホーム君の活躍(?)を描いたもの。3・4年生の面白い本を、という子にお薦めの1冊である。マックロスキーは、自然豊かなメイン州の離れ小島にアトリエを置き、ここで一年の半分を、家族と共に生活をしながら仕事をした。

ここでの生活から生まれたのが、1948年『サリーのこけももつみ』(石井桃子訳 1785円 岩波書店)。1952年『海へのあさ』(石井桃子・訳 1785円 岩波書店)。1957年『すばらしいとき』(わたなべしげお・訳 1575円 福音館書店)の3冊。



『サリーのこけももつみ』は、濃い青色の線画で描かれた絵本である。人間の親子とクマの親子が登場し、夢中になってこけももを摘んだり、食べたりしている親同士が、それぞれ子どもをとりちがえるというところが面白い。

親たちの目的意識(冬にそなえててジャムを作る・栄養を充分に取り込む)と、子どもたちはの自由奔放な行動との対比がこの絵本の魅力の一つだろう。

それにしても、この絵本の見返しに描かれている場面には、一家の大自然の中での暮らしが描き出されていて、とても惹きつ

けられる。

壁の時計は午後4時を少し過ぎたところであり、窓辺には桜草の八チが置かれ、その向こうの自然の景色が望まれる。山から帰ってきた二人、サリーの方は椅子に乗って相変わらず、母親とは無関係に瓶詰めゴムの中ブタを使って自分の遊びに没頭しているし、母はジャム作りに余念がない。落ち着いた時は流れていく。こんな暮らしに憧れるのは、ぼくだけが・・・。



前作ではまだ小さかったサリーだが、『海へのあさ』では下ジエーンという妹も登場して、一家の無人島での、ある一日の生活が描かれている。この絵本も、濃い青一色で表された絵本である。

ぼくはマックロスキーは、親としても、画家としても子どもを実によく見ていると思うのである。

この絵本の中でもマックロスキーは、本来の絵本の展開とは別に、自由奔放に動き回る幼いジエーンの世界を描き出すことで、絵本にふくらみを持たせることに成功していると思うのだ。読者はジエーンの動きだけを追うことで、別の物語を読むこともできるのである。

さて、この絵本でも、お話の底流に流れていて、なおかつ、場面のあちらこちらにちりばめられているのが暖かな(上質な)

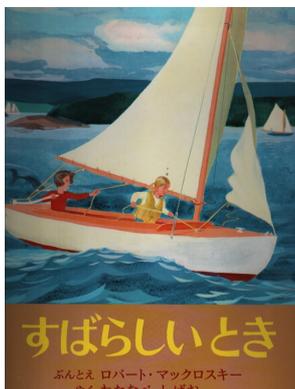
ユーモアである。

物語はサリーの乳歯が抜けたことを中心に展開していくのであるが、おとなたちが、サリーの歯の抜けたことをからかう場面がある。コンドンさんはサリーに「歯の抜けた後に舌をつっこんじやいいけないよ」と言うのである。続けて「そっとしておくよ、わたしの歯みたいにぴかぴかした金歯がはえてくるからな」という場面である。

この大人と子どもやりとりのこの箇所が、ぼくは大好きだ。大人と子どもとの関係については、こつじやなくちゃね。

3作目の『すばらしいとき』で、マックロスキーは2度目のコールデコット賞を受賞した。この作品は、前2作と違い、カラー刷りである。

父親であるマックロスキーが、島の春から夏の終わりまでの娘たちの半年の体験を、二人の娘に語りかけるとい形式が採られている。



「ベノスコット湾の水面に岩勝ちのみぎわをみせる小島の上で、みてごらん、世界のときがゆきすぎるのがみえるから。一分一分、一時

間一時間、一日一日、季節から季節へと・・・」で、始まる、格調の高く詩情豊かな文章である。

特に、冒頭の雨が湾の向こうから、自分

たちの所へ迫ってくる情景や、二人の少女が、夜の海へボートを漕ぎ出して海の中を懐中電灯で照らしている場面や、さらに、嵐が島をおそってくる数頁の迫力ある場面の絵は圧巻である。

この3冊の絵本は出版社の都合で(都合つて何さ?)品切れ(休刊)になったり、復刊になったりが繰り返されてきたが、現在は3冊とも版元に在庫があり、流通している、入手は可能である。

さて、最後に1963年に出版された『沖釣り漁師のバート・ダウじいさん 昔話ふうの海の物語』(渡辺茂男・訳 2040円 童話館出版)について。

この絵本は、以前はほるぷ出版から出たが、童話館出版から復刊された。



内容はヘミングウェイの「老人と海」の要素と、クジラのお腹にボートごとはいるところは「ピノキオ」の要素も含んでいるような大形の絵本。

以上が、現在翻訳されていて、流通しているロバート・マックロスキーの本である。

あなたも、この夏、大自然に囲まれたアメリカはメイン州の生活を絵本を通して満喫してみませんか。紹介した絵本は全点ピツポでは揃えていません。

マックロスキーさんのご冥福をお祈りいたします。

大井川東侯へ

Sさんが誘いに来た。「ルートも去年確認してあるから、上西(上西河内沢)をやるうよ」と言うのである。ぼくは勿論、即座に断った。今頃は、寸又水系に入る自信など一欠片もないのである。第一この3年、溪流には一度も出かけていない。そんなぼくが、寸又の沢詰めなど出きるわけがないのだ。

しかし、今年はどうしても、溪流釣りを再開したいと思っただけなのである。そこで「東侯ならいいよ」と逆提案してみたら、「東侯か、そうしよか」ということで、東侯への釣行が決まったのである。5、6年前、やはりSさんと中侯を詰め、塩見岳に登り、東侯へ下降したことがあったが、それいらいの東侯である。

聞いてはいたが、東侯林道は数年前の面影もなく、荒れ果てていた。この林道は取水堰を作るため、池の沢の手前まで復活されたのだが、取水堰の完成した今は放置されたままになっている。

当たり前のことだが、林道などという物は、人間が力業で自然を破壊して作るものがあるから、手を入れなければ1年で通行不能になるのである。後は、目に見えて崩壊していくのみである。大井川水系にはこんな林道が、どんなにたくさんあることが・・・

釣り人などという輩は、林道があればあつたで、これを利用して奥へ奥へと足を伸ばして他人を出し抜こうとするし、林道が壊れれば壊れたで、昔のようにイワナが復活することを期待するものである。(もしかしてぼくだけかな?)

さて、壊れた林道をたどって、途中林道上のシナノナデシコの群落を楽しみながら、1時間ほど歩いたところから入渓した。Sさんは最初からテンカラ(毛針)釣りで、ぼくは餌釣りをやることにした。最初の2時間は二人ともイワナの姿も見ることができなかった。

釣れないこともあるのだろうが、岩を登ったり、降りたり、飛んだり、跨いだり、流れを徒渉したりする事に、ぼくはとて疲れを感じるようになってきた。かつてのように、体が軽やかに溪流遡行に反応しないのである。

そんなとき、Sさんが最初の一匹を掛けた。疲れもどこえやら、ぼくは俄然釣欲がでてきた。釣り方も、餌釣りからテンカラに替えた。

入渓したときから気になっていたのだが、遡行していく先々に足跡が残っているのである。この足跡は昨日のものだと、無理に思うことにしていたのであるが、僕らより2、3時間前に歩いた後で有ることが確実になってきた。道理でイワナの出が悪いわけである。

さらに1時間、ようやくぼくの毛針をくわえてくれたイワナがあった。だけど、悲しい。20センチにも満たないちびすけイワ

ナだった。流れにお引き取り願った次第である。Sさんは3匹ほど魚籠に納めたようである。焦るなー！

さつきから、イワナが毛針を見に出てくる回数が増えてきた。水温が上昇し、活発になつたためか、魚が濃い場所なのか。23cm〜25cmのイワナが立て続けにヒットした。これはキープしておこう。

ところがどうだ、またまた、魚がピタッと出なくなつてしまった。先行者を呪いたくなつてきた。

川の兩岸が狭まり、大きな淵にさしかかった。ルートは左岸側である。左岸へ一度渡り返さなければならぬのだ。自分のいる右岸も高さ2mほどの所を横に数十mトラバースすれば、どうやら、抜けられそうである。

片手に竿を持ち行動を開始した。Sさんは難なく抜けた。ぼくも後に続いたのだ。途中もう一段上にあがるため。右手で竿を持ち、左手で上の岩をつかんで反動を付けて体を持ち上げた。たんに体が飛ばされて、水の中に落下してしまつたのである。

あつ！と、思つたときには水の中だった。淵は深く、底までは大分あつた。ザツクの浮力ですぐ浮くことができたが、落ちた精神的なショックは大きかつた。それよりもぼくは、水中では眼鏡を押さえ、竿を離さず向こう岸へたどり着くのに必死であつた。幸い怪我もなく岸へ泳ぎ着いたが、淵に突

き出た岩の上だつたらと考えたらゾツとした。全身ずぶぬれである。夏で良かった。

冷静に考えれば、毛針などを入れたウエストバッグが、体を持ち上げたときに岩に当たつて、体を出したのが落下の原因だつたのである。ぼくの初歩的なミスである。

よく見ると、竿が折れていた。もう止めた！ぼくはすっかり釣欲が醒めていた。まだもう少し釣りたいというSさんと別れて、バイクの所まで先に戻ることにした。

一気に河床まで崩落している箇所や、既に木が生えている場所など、林道は様々なすがたを見せていた。壊れた林道上をたどつて、2時間ほどでバイクの置いてある所まで戻つた。Sさんを待ちながら、昨夜から一睡もしていなかったもので、林道上で眠つてしまつた。

午後5時、気付いたら1時間半が経つていた。途中で出会つた、取水堰まで作業にいつた人たちが戻つてきた。

彼らに聞いたら、Sさんはまだ釣つていたという。ぼくのバイクはライトがつかないので、暗くなると林道を走れない。先に帰ろうかと思つているところに、Sさんが戻つてきた。二軒小屋から1時間半も走れば、車の置いてある畑雑のゲートまでいけるから、何とか明るい内に着けるだろう。

椹島の近くまで来たとき、Sさんが「ぼくここでもうちよつと釣つていくから」と

言い出した。ぼくは、先に帰ることにした。

赤石ダムの上のトンネルを抜けて暫く走つたところで、ななななんと！バイクがパンクしてしまつたのである。ここからだ、歩けば、まだ、3〜4時間かかつてしまうだろう。

絶望的な気持ちになつたのだが、パンクをしていても、ゆっくりならバイクに乗つて走ることが出ることが分かつた。これしかない、覚悟を決めて、少しづつ乗りながら降つていたら、後ろから東侯で出会つた作業の人たちの車が降りてきた。

ダメで元々だと考えて、思い切つて車を止めて、事情をはなしてみた。そしたら、バイクを積んで車に乗せていってくれるという。あーこれぞ地獄に仏！

と、言うわけで無事畑雑ダムのゲートまでたどり着くことができたのである。午後9時帰宅。

本当に久しぶりの源流釣りだったので、本道具（バイクや釣り竿）もまだ準備不足で、体に馴染んでいなかったようである。少しずつ慣らしてゆつづのが良いようだ。さて次回はどこへいこうかな。

インフォメーション

*「ばあやのおはなしかご」今月はお休みします。次回は9月27日（土）に開催を予定しています。